

# 鶴見俊輔は、どうして自分の解釈理論を 実践できなかったか

——学びほどこき、多元的自己、個人史的読解、エピソードという方法

谷 川 嘉 浩

## 1. 書くことから読むことへ——解釈の理論と実践

読み書き、と一息で表現する言葉があることを思えば、私  
たちは、読むことと書くことを並列するにふさわしい、近  
縁の行為だと考えているのだろう。とはいえ、すべての人が、  
対等な関係として捉えるわけではない。私は、以前、鶴見俊  
輔（1922-2015）の作文に関する言説を経年の追跡し、彼  
が書く行為により、自律性をいかに育むかという論点を発展  
させたことを示すと同時に、その論点が彼の「理想」と深く  
関連することを示した（谷川、2018; 谷川、2019a）。知的自律  
性は、彼が生涯に渡って追求し続けたテーマなので、それを  
可能にすると考えられた「書くこと」に優位性を置いたとし  
ても不思議ではない（cf. 谷川、2019c）。

実際、鶴見は、著述についてごく旧来的な認識を持つ（鶴

見、2007, 12-3）（1）。例えば、晩年の座談で最初の自著を『ア  
メリカ哲学』（1950）だと述べた際、それ以前に『哲学の反省』  
（1948）があるではないかと問われた鶴見は「かたちからいっ  
て、一冊分の長さがある本」は『アメリカ哲学』だから、こ  
れが最初の本なのだと答えている。また、この直後にある、  
雑誌『思想の科学』立ち上げに参加した武田清子や丸山眞男  
といった六人の年長の同人たちが「何一つ仕事のなかった」  
鶴見に「よく編集の手綱をとることを任せてくれたと思う」  
という語りからは、誇るに足る仕事は、一定の分量ある言葉  
を公開することだとの考えが透けて見える。

それに対して、読むことへの態度は冷淡である。西田幾多  
郎が参禅の経験から W. ジェイムズを読んだことに鶴見は注  
目し、獨創性はしばしば取り違えから生まれるのだという観  
点から、解釈を正確性で判断しないことの必要性を訴える

(Ibid. 167-8)。それどころか、彼は、正しく読むことを教えないという積極的な選択を採ってすらいる。

丸山〔眞男〕さんは、自分のゼミナールに来る人間に、型をきちんと教えるんだ。江戸時代の荻生徂徠をそういうふうに解釈したら間違いだ、そういうことをきちんとやるわけ。「だけれど君は、それをやらないじゃないか」と、私に言う。(中略)そこに教師としての私の欠点があることは確かなんだけれど、そんなことをやりはじめたら、いったいどうなるんだ? というのが私の答えだろうね。そんなことをやりはじめたら、普通の哲学の教授になっちゃうじゃないか。(Ibid. 45)

読むことへの冷淡さは、彼の反アカデミズム的態度と絡み合っていることが伺える。市民向けの文章講座に登壇し、その成果を『文章心得帖』として出版していることを思えば、「読み」と「書き」の教育に対する鶴見の態度は対照的である。しかし、晩年の鶴見は、読むことの重要性を一度だけ類例のない仕方でも語ったことがある。上坂冬子や佐藤忠男といった『思想の科学』の読者が、雑誌を通じて書き手になっていくプロセスに触れた箇所の直後である。

読み手から書き手になることは巧みにやる人は何人もでて、それを助けることは出来たと思うんで

すが、書き手から読み手になるっていうことが、さらに難しいんですよ。これがうまくいかなかったっていうことは、私にとって非常に空しい感じを与える原因ですね。読み手として深まるっていうのは、大変難しいことなんです。(鶴見ほか、1997b, 30)

書き手の自立を支援することで知的大衆を現出させ、大衆と知識人の連続性を示したのだが、その逆は困難だったと彼は言う。ここで重要なのは、読む行為が、基本的に悪しきアカデミズムと結びつけられがちなのだが、ある種の読解は価値あるものとみなされたことだ。

本稿の目的は、鶴見の読書論を検討して彼の解釈理論を再構築し、その問題を明らかにすることである。問題点とは、解釈における彼の理論と実践のすれ違いのことであり、実のところ、「空しい感じ」を生じさせたのは、彼の解釈実践に問題があったからなのだ。鶴見は、言語や身ぶり、芸術、漫画などの「記号」について生涯論じたので、記号の読み解きに関わる本論の射程は、彼の哲学全般に及んでいる(註)。

## 2. 固定化する解釈への抵抗

鶴見の解釈理論は、彼の全体的プロジェクトと明確に関係づけられている。他者の罪を告発する方へと向かう思想に彼が抱く警戒心について瞥見し、その関係を確認していこう。

……キリスト教は、常に自分が正しいと思っていて、

「あなたは間違っている」という。ところが聖書を  
読んでも、イエスはそういうことは言っていない。  
不倫の罪を犯した細君をみなが糾弾しているときに、  
「罪なき者、この女を打て」と言っているでしょう。  
「あなたは間違っている」と言うのとはちよつと違  
うんですね。(鶴見 2010, 6)

キリスト教、あるいは、それと同様の構造を持つとされる思  
想(マルクス主義やウーマン・リブ)<sup>(3)</sup>が、糾弾や告発の  
姿勢を持つと鶴見は考えた。それらが一枚岩でないことを知  
りながらも批判するのは、そうした立場が決め打ち的に物事  
を解釈する傾向があると判断したからだ(鶴見 2010, 15-32)。  
実際、「敗戦後、マルクス主義から「プラグマティズムが」  
受けた批判は、これは敵の本だからひっぱたくと、あらかじ  
め決めておいてそうしている著作」が多かつたとの回想もあ  
る(鶴見 2007, 212)。

決め打ち的な態度は、しばしば厳密性と紐づけられる(鶴  
見 2010, 6; 谷川 2018)。

用語が一語一義で、「マルクスはこう言ってる」。定  
義はピタッ。「レーニンはこう言ってる」。定義はピ  
タッ。これをやったらえらいことなんです。それで  
論争ということになったら、その論争はすごいです  
よね。堡壘を築いてやるわけですから。(中略)問  
題はそこにある。(鶴見ほか 2018, 127)

問題は、厳密さにこだわるあまり、言葉の重層性を切り捨て、  
常識や日常という背景を忘れてしまうことにある。引用文  
の直後では、原子という「精密に、一義的に決まっていると  
いう術語でさえも、その意味確定に2500年の時間がかかっ  
ている」ことを思い出すよう促される(Bid. 2830)。さらに、  
厳密さの表面的追求への警戒を語る際に、ホワイトヘッドの  
「精密さは作りものだ(Exactness is a fake)」というフレーズ  
に主張を象徴させるのが彼の習いだった(鶴見 2009, 114  
など)<sup>(4)</sup>。

議論の度に必要に応じて論点を絞ることを称揚しようと  
し、鶴見は精密さの追求を軽視したわけではない(鶴見ほか  
2018, 746)。だが、精密さは、彼自身がその系譜の一人であ  
るプラグマティズムの観点からも重大な論点である。プラグ  
マティズムという言葉が多義的であり、その多義性に甘んじ  
て宣伝効果を高めているというA.O. ラブジョイ以来の批判  
にどう取り組むかという問題があるからだ。特に鶴見は、プ  
ラグマティストが多義的な集合体であることに価値を見てい  
たため、精密さの欠如自体を説得的に擁護しなければならな  
かつた。鶴見は、「ラブジョイの批判を受け入れつつ、その  
論理的警戒を覚えていながら」、プラグマティズムを一個の  
運動体と捉えた。そして、「ばらばらの主張を含みながら、  
同時代に影響をもつてゆくところ」に注目し、運動体内に軸  
を作つて、その多元性を論じた。鶴見は、プラグマティズム  
という旗印の下で集合した重層性にこそ、この思想の優位性  
があると考えており、列伝風にさらに層を増やすという戦略

を採った。(鶴見, 2007, 165-6) (5)  
 思想の重層性への肯定は、R. W. エマソンのフレーズを通して語られることもある。

南北戦争とその後の迷走と錯綜の多い時代のなかで、エマソンはつねに時代の中で何かを話し、「終始一貫とは、心のせまい人ととらえる化け物だ」——  
 “Consistency is the hobgoblin of little minds.”と言った。  
 [...] ハーヴァード大学の教授だったプリンス・ペリー校訂による『エマソンの日記』を読んでも、もとは日記の中にあつた記述からとりだして、そのおもしろいところをつないでいるから、つじつまがあわないう。読まされるほうがさうとう迷惑なんだよ。  
 (Ibid., 74)

こうした首尾一貫性にこだわらない態度は、しばしば毫碌と結びつけられており、意識的な混同やアナロジーといった彼の発想法と関連しているようである(6)。例えば、アメリカ留学時代に留置所に入れられた際、彼が出会つたボクサーの自己抑制の倫理——自身の腕力が他者をどれほど傷つけるか知っており、その力を恥じている——を、科学技術を用いる者の責任の問題と結びつけたように (Ibid., 214)。

しかし、本稿にとって重要なのは、「つじつまがあわない」文章の毫碌的な可能性ではなく、丁寧に読むことの意義を指摘してゐることである。以下は、鶴見が留学時代に受けた

語学訓練についての文章だ。

私ははじめて英語を勉強したとき、エマソンの“Compensation”（償い）というエッセイを読んだ。一セクションごとに飛びが多いんだ。何を言っているのか、そのパラフレイズを英語でつくるんだよ。……35とか50とかある節の一つ一つを、今の日常英語で言い換えて文章をつくる。それを教師が監督するんだ。そういうことが英語を勉強するうえで役に立っているね。(Ibid., 74)

こうした地道な読みの重要性については、マルクス主義によるプラグマティズム批判の中で、鶴見が古在由重の読解を評価したことからも伺い知ることができる。

……戦前、USAに発つ前に、「唯物論全書」を買いそろえて、そのなかの一冊、古在由重(1901-90)著『現代哲学』を愛読していた。そしてUSAに行つてから、プラグマティズムの原書の流れとして読んで、古在由重が原著をしつかり読んで要約し、批判していることに感銘を受けた。(Ibid., 211)

これら二つの引用は、本稿冒頭に示したのと異なり、いずれも文章を適切に読むことの重要性を彼が無視していないことを示している。しかし、重層性への志向と精読の重要性はど

う整合しているのだろうか。

### 3. 自己に根差した読解——コナトウス、学びほどこ、多元的自己

敗戦後すぐに書かれた哲学的マニフェスト『哲学の反省』では、哲学の役割が、指針・批判・同情の三つの理念型に分けられている。それぞれ、社会集団や個人への指針の提示、その指針の批判的吟味、それを提出した人物の境遇への想像を指す。同書では、「同情」に最も紙幅が割かれる。

人間は、いかなる場合にも、己れの立場を完全に捨てるということが出来ないから、他人の世界に同情する場合にも、批評的態度を全く離れることは不可能であろうけれども、まず出来得る限り自己を滅却して相手の難関中に没入することが必要である。(鶴見, 1992, 459)

相手の立場をくぐる共感的な姿勢から物事を理解するという指針は、自分が既に持つ信念を組み合わせ、取り換え、修正を重ねながら、何とか他者の信念体系を整合的に理解することだと言える。従って、同情は、自己理解を修正しつつ他者理解を試行錯誤的に行うのだから、謬見や独善の訂正を伴っている(7)。

哲学の同情的役割は、後年、解釈の問題として位置づけ直される。W.ジェイムズが、スピノザを読んだ際に欄外に書

き込みをするほど強く「コナトウス」という概念に惹かれたこと鶴見は注目した。

ジェイムズが本の読み方として言っているのは、自分個人のいまの欲望をもって、書かれている概念を貫くとき、そのときに自分なりの概念ができる。欲望というのはスピノザで言えば「コナトウス」なんだ。「コナトウス」が活字を貫くとき、概念ができる。(中略)自分の欲望がなければ、本の読みはできないというのがジェイムズの考え方だね。(鶴見, 2007, 193-4)

人にはそれぞれ異なる関心や個人史があり、それぞれの境遇/地平を持つというのが鶴見の初期からの立場だった(鶴見, 2008, 150-3; 谷川, 2019a)。そのモチーフを変奏するように、ここでは、自己の関心に沿って思想を読み解くべきだと指針が提示される。

引用文への補足として、学習者の興味を中心に教育を再建しなければならぬというジェイムズ及びデューイの教育論に言及されることから示唆されるように、彼が重視するのは、提示された命題を一義的に暗記し、それを固定することではない。むしろ、自分の事情や関心に基づいて、学んだことを「学びほどこ(unlearn)」ことだ。学びほどことは、「習った通りにしゃべる」状態を超えて、「何か普通の、日常の言葉として」学んだ内容を言い当て、自分なりに使えるようにな

ること、つまり、自分なりに学びを咀嚼することである（鶴見、2010, 61-5）（8）。それを「コナトウスが活字を貫くとき概念ができる」と言ったのだ。

鶴見はこの概念をこれ以上詳論していないが、彼の姉・鶴見和子は、生活綴方運動の主要な発想たる「概念くだき」に基づき、同様のことを詳細に論じた。

概念というのは経験の脈絡中から描き出して、抽象的な言葉として構成された考えですね。それを「くだき」というのは、概念をもう一度元の経験の場に返して考え直すことです。そしてその概念そのものを作り変えていく、事実に合わせて作り変えていく。そういう過程がものを考えるときに必要だということです。私たちは大学の中では、物事を抽象的に考えてる。学問ていうのは抽象的な言葉を使えば、それだけ高邁な学問であるという間違った考え方が私たちの中にはあると思うんです。決してそうではない、概念と概念をつなげていけば学問になるというのは、これは本当の学問ではないと思います。（鶴見、1998, 24-5）

和子は、具体的な経験から自身か他の誰かが抽象化して作ったはずの「概念」を再具体化するよう説く。そうした内化なくしては、学んだことを学んだ通りに意味もわからず繰り返すことしかできない。概念を自分の経験に即しつつ考えなお

す習慣を持つ必要があるのだ（9）。

鶴見俊輔は、プラグマティズムにおける多元主義を、一人の人間の内にある多元性を見る立場と関連づけた（鶴見、2007, 153）。彼は、上で見た「学びほどこき」のモチーフを、晩年の解釈理論で、「自己」の問題として捉え直している。

〔ジェイムズは〕自分の内部の測り方に非常に関心を持っていて。いったい、セルフという概念はどうやって出来ているのかという問題を考えたとき、セルフのそれぞれの瞬間のなかに、一つだけ、ほかのセルフの瞬間から自分自身が免れる役割をつくるやつがある、それがジェイムズの「自我」の概念の根本なんだよね。（Ibid. 132）

この発言と共鳴するように、少し後では、「科学者というのは24時間、常に科学者であるわけではなくて、暮らしのなかでは、科学から逸脱する行動の形態と向き合っている」と考へるべきだと述べており、自己の重層性（selves）へと注意を促す。

鶴見は、「近代的自我」という揺らがなない固定的な自己像と対比しつつ、多元的自己という発想を「いろいろなものの複合でできている」とか、「人間は、自分の中にたくさん人間がいるというか、いろいろなものがひしめき合っている」と説明し、「そこには隙間があるもの」だと指摘する（鶴見ほか、2015, 191）。ここで隙間という表現が選ばれたのは、様々

な自我のせめぎ合いや対立を言い当てるためだ。エマソンが、自分は「一つの党」であるという立場から社会問題と関わったように、鶴見は、自己を「一個の群衆」だとみなした（鶴見、2007, 109）。せめぎ合う諸部分から成る合衆として、一つの人格を描くことができる考えたのだ（鶴見ほか、2015, 193）。

こうした多元的自己論は、同時に、鶴見の個人史に触れる告白でもあった。

その「多元主義の」受け手として、私は父と母とのベニヤ板、つまり合板と考える。父は私に、私の学問の種をくれた。私の学問の主題は転向の共同研究で、それは、おさないころから食卓をともにしてきた父親〔の転向〕を、長く見てきた感想をもとにしている。母のほうは、記憶にのこる前から一本の棒として私をなぐってきた価値基準であって、私のなかで、この父母両者は相容れない思想の要素である。両人が真でからも、私の中で、両者の対話はずつづく。誰しも、そのようなベニヤ板ではないのか。（鶴見、2007, 202）

「誰しも」のニュアンスをなぞるように、彼はメタフィジカル・クラブに参加したホウムズ、パース、そしてジェイムズとその兄弟たちの個人史で例証している（Ibid., 154）。彼らは、自身の親世代とは、差別意識、教育方針、戦争認識などをめ

ぐって、様々な対立を抱えていた。そうした身近な他者との具体的対立や、戦争・挫折・喪失の経験などを通じて、自己の多元化とせめぎ合いが生じ、彼らの思想が発展していくと語られる。

こうした多元的自己論は、記号の解釈を一義的に固定しないための基礎を与えている。というのも、一つの人格は、実のところ、諸々の自己のせめぎ合いの場にほかならず、従って、自己把握は揺らぎうるものであり、また、彼の読書理論が「自己に根差した解釈」を推奨するものである以上、自己把握の重層性は、解釈の固定を退けるのに資するからだ。そのことは、ハーヴァード留学時代に彼のチューターだったマク・クワインに言及しつつ、解釈は常に改訂に開かれていると指摘することからも確認できる（Ibid., 203）。鶴見にとって「解釈」とは、自己の多元性を念頭に置きながら、自身の関心を見極めつつ、（同じく多元的である）他者の記号表現に向き合うことなのだ。加えて、読み手と書き手における自己の揺らぎを基礎に、解釈の可変性を指摘することは、文献の確な読解からほど遠いどころか、科学的精神を伴った解釈の前提条件ですらある（10）。

そうして生まれる読みは、テキストに基づいたものでありながら、同時に個人的である（11）。その実例として、鶴見は『善の研究』に言及する。

ジェイムズの『根本的経験論』は、近くの底まで降りてゆけば純粹経験——たとえば「机」は、知覚す

る当人のイメージの脈絡に置かれれば当人の心理的イメージであるし、その同じ経験がモノの脈絡に置かれればモノであり、どちらと理解されても、もとに戻ればおなじ純粹経験だという。これが只管打坐するなかで西田の達する純粹経験として理解されると、それは人生の善と感じられる。(Ibid., 167)

この読みの基礎は、「自分の座禅から得た日常感覚」であり、留学生として西田がジェイムズに会ったとすれば、彼は「そういうふうには君は読むのか、おもしろい、と受け入れたらう」と鶴見は推測する (Ibid.)。同じことを鶴見はこうも語った。

西田はある意味でジェイムズを正しくとらえているんだ。英語の解説は間違えているけど、読み方の姿勢としては正しい。10代からやっていた座禅で、ほとんど無想無念になって、ただ呼吸みたいなものだけがあって、純粹経験に達する。(中略) ジェイムズはそんなこと、書いていないんだよ。でも、ジェイムズの『エティカ』の読み方からいえば、それでいいんだ。西田はその意味では、誤解だけ正解といえるかもしれないね。(Ibid., 194)

鶴見の考えでは、ジェイムズを読む西田こそが、スピノザ読解によって作られたジェイムズの解釈理論を的確に実践して

おり、理想的な読解の代表なのである。

ところで、対象の陰影を消し、当座与えた解釈から零れ落ちていくものに目を向けることを「ジャコモメッティの嘆き」と呼び、対象の汲みつくせなさが論じられたことがある(鶴見, 2018, 146)。芸術家のジャコモメッティがある人物の肖像を描こうとしては挫折し、常に未完に終わるというエピソードを受け、「一人の間を描」き尽くすこと、ひいては、「社会の最終的な像をつくる」ことの不可能性を指摘するというものだ (Ibid., 146)。つまり、自己形成を通じた読解による一義的な解釈への抵抗は、人物を見定めるときにも当てはまる。この点に注意しつつ、彼の具体的な解釈実践に視点を移したい。

#### 4. 個人史的解釈と、エピソードという方法

キャリア初期、鶴見は、「生活綴方」という作文教育運動を日本産のプラグマティズムとみなした(谷川, 2008)。すでになされた行動を反省するという順序で進められる「生活綴方」は、「行為(プラグマ)が思想に先んじることを主張」する点で、アメリカ産よりも徹底してプラグマティックだと評価された(久野ほか, 1956, 74-6; cf. Tanigawa, 2019)。ここで重要なのは、彼の立論の妥当性ではなく、鶴見が書く行為を優位とみなしたことそれ自体である。

書くことに優位を置く議論を振り返って興味深いのは、属性や名望に囚われない「ただの人」として書いているつもりでも、書き手で居続けるうちに、何らかの評判がついて、有



名化し、「いつか必ず『ただの人』から外れるときがくる」という、鶴見の指摘した困難である(鶴見ほか、2015, 307) (2)。ここで言う「ただの人」とは、立場や身分、周囲の評価などによって左右されない姿勢であることを指す。一方、別のところで、「読み手から書き手になることは巧みにやる人は何人もでて、それを助けることは出来たと思う」が、「書き手から読み手になる」ことは難しいと鶴見は語っていた(鶴見、1997, 30)。これらを考え合わせると、書き手が有名化し「ただの人」でなくなることは、書き手を「ただの読み手」であることから遠ざけてしまう。書くことに優位性を置いた鶴見は、いまや読むことに復讐されたのだ。しかし、こうした名声の問題以上に、鶴見の具体的な解釈実践こそが問題を抱えていた。つまり、彼が自身の理論を適切に遂行できなかったのだ。以下では、鶴見の具体的な解釈実践を検討すること、その点を示していく。

『メナンド』『メタフィジカル・クラブ』などの資料を踏まえ、鶴見は、ホウムズ・ジュニアの境遇をこう語る。

たとえば、黒人奴隷を逃がす集団が南部にあつて、北部諸州のなかにもう奴隷を連れてきている。脱走兵援助とおなじだね。そいつが警察につかまったりして、流血の惨事がある。ジョン・ブラウンは、相手方をおつ殺しちゃう。そういうときに親父のホウムズは、曖昧なことをやって結局逃げる。それに對して、汚らしい嫌な野郎だ、文化人っていうのはこ

れだけのものなのかという、非常に強い不信感がホウムズ・ジュニアのなかに生じるんだよ。(鶴見、2007, 107-8)

この説明を聞いた作家の黒川創が「ご自身の話」を聞いているようだと言を向けると、鶴見はそれを肯定した (Ibid., 108)。個人史の重ね合わせが、そのまま思想の解釈になっているのだ。

この素朴な重ね合わせに暗示されるように、彼の解釈は、実質的には、書き手の個人史に重なるものを、自己の「体験あるいは体験に代わる想像力」(鶴見、2008, 172) から探し出し、短絡させるといふ仕方で遂行される。つまり、彼は、解釈を自己形成の問題に回収したのである。

〔石橋〕湛山の伝記をいくら読んでもわからないのは、どうして湛山はあれだけ立派なパーソナリティーだったのかということだ。湛山の伝記を三種類くらい読んでもわからないんだ。そしたらね、ただ一つの手がかりは、松尾尊允から聞いたんだけど、彼は日蓮宗の管長の私生活だったんだ。彼自身のオリジンにそういうものがある。それくらいしか考えられない。柳宗悦の場合も、わからないね。(鶴見、2007, 236-7)

ただし、埴谷雄高や丸山眞男が、サイレント映画を観て、劇

場という暗闇で活動写真弁士の出す悲鳴や叫びに魂を揺さぶられたであろうことに注目した（鶴見ほか 2015, 312）ように、自己形成といっても、いわゆる「生まれ」に限定されるわけではない。

姉に関する言説を見てみよう。彼は、和子をその時々の一番組に做う「一番病」だとみなし、彼女は変節を繰り返したと批判する（鶴見ほか 2015, 202, 252-3）。しかも、和子による解釈実践は鶴見にとって「決めうち」そのものだった。

戦後の「思想の科学」を読めばわかるけれど、「マルクスは正しい、デューイは間違っている」という立場で（和子は）書いている。（中略）いかにマルクスが偉いかを言うために、デューイの欠点をあげる。彼女がデューイはやっぱり偉いと思うのは、共産党から離れてからだよ。（鶴見 2007, 100）

この理解に基づき、彼は、晩年に脳溢血で倒れるまでの姉の業績すべてを一番病の産物と切り捨てさえした（鶴見 2010, 513）。この種の反感は、アメリカ留学時代にはすでにあったようだ。

……私の姉は、ニューヨーク州のヴァツサー大学の大学院哲学科において論文を準備していた。その題名は、マルクス主義哲学の側にたつて、日本の天皇制を批判したもので、「——」について、——の力点を

おいて、——の面からの考察」と、優等生らしくさまざまな限定のついた論文名を知らせてきた。／……返事として、私は、自分の用意している学士論文は“A Theory of non-existential being with a special emphasis upon nothing in particular”（特に何についてもことさら力点を置かぬ非存在の理論）という題だと書いておくれた。／すると彼女は、姉弟でもずいぶん違う論文を書くものだ、というまじめな返事をおくってきた。（鶴見 2007, 160）

鶴見は姉の返事を、皮肉を理解できないほど凝り固まった知性であることの証左だとみなした。

しかし、これを無理解ではなく、冗談を理解した上で、あえて堂々と応答したユーモアある態度として解釈することは十分可能である<sup>(13)</sup>。批判とは異なる脈絡では、鶴見が捉えていた姉のユーモアある一面は、その解釈の傍証になるだろう。

イギリスの新聞王だったノースクリフが来日したとき、和子は、彼を囲む宴会が開かれているのに、幼い自分は近づくなど言われるのが非常に不満で、このこ出て行ってノースクリフに「Be……」と名乗ったんですね。あとは「ペラペラ」とだけ言って平然としている。（鶴見 2009, 26）<sup>(14)</sup>

「ペラペラ」というフレーズを堂々話したという挿話。臆せず行動し、穏やかな笑いととも他者と付き合うことのできる人物として、鶴見は姉を描いた。しかし、鶴見が姉を批判するとき、和子のこうした側面は落ちており、自身を姉から意識的に距離化しさえする（鶴見 2008, 435）

同じことがベ平連で社会運動をもにした作家の小田実にも当てはまる。

おふくろは、……要するに純粹無垢なんだよ。もとをたどれば、おふくろに原罪観念があった。自分が父親（後藤新平）の娘であることで、生まれてからずっと優遇されてきたことに対して、自分にはその値打ちがないと思っていた。それを私に押し込んだんだよ。私は生まれたときから悪人の意識がある。俺は悪人だつていうことから、一歩も引かない。だから、ベ平連のときなんか、とつてもつらかったんだ。たくさんの人が来て、その前で演説したけど、悪人として演説するわけにもいかないだろ。あれがつかつたね。小田実には、あのつらさはわからないうよ。（中略）小田は無邪気な善人としてしゃべっているんじゃないの？（鶴見 2007, 236）

別の本でも類似のことを語るように（鶴見ほか 2015, 157）、行動を共にした小田への敬意と恩義を語りながらも、鶴見は、小田が、正義を背負ってそれを疑わない無邪気な人間だと信

じて譲らず、その内面に同情や想像を向けようとはしなかった。このように、自他の個人史を紐づけて理解できず、他者が批判対象だと思われたとき、鶴見は、こうした画一的な解釈を述べがちである。その決め打ちの姿勢は実に強固なので、同席する者が相当に食い下गरなければ、鶴見は解釈を逸脱する側面を語ることにすら拒む<sup>15</sup>。では、彼が解釈実践に失敗したのはなぜだろうか。

自己に根差した読解は、当の自己の多元性ゆえに、一律にこれが正しい解釈だとは言えないという読みを可能にするはずだった。しかし、鶴見は、自他の個人史を短絡させるという仕方での読解法を運用したので、気質上折り合えないと彼が判断した人物や文脈では、「これは敵……だからひっぱたくと、あらかじめ決めておいてそうしている」（鶴見 2007, 212）という、彼が批判したはずの解釈実践に陥った。要するに、彼が自分の解釈理論を実践しそこなつたのは、「自己に根差した仕方を読む」というジエームズ流の解釈理論が、《自身の個人史に親和的な要素を、書き手の自己形成に見出し、それに即して人物を読み解く》というスタイルに変質したことから帰結している。しかし、気質的な親近性は直接のきっかけではない。問題は、何が理論を変質させたかである。

自他の個人史や自己形成に関わるエピソードを好み、それを膨大に記憶し、繰り返し語つた。講演や対談、エッセイや普段の会話などで、自己形成に関する挿話を繰り返し語ることで、彼はそれらを洗練された物語へと研ぎ澄ませた。物語

の洗練が、そのストーリーに乗らない要素を見落とす動きを伴う以上、それは類型化への道でもある<sup>(16)</sup>。個人史やエピソードを好むという鶴見の思想的スタイルが、ジェイムズの解釈理論を変質させる要因だったのだ。伝記・評伝や、個人史をベースとする彼の思考スタイル自体が、他者を類型化し、解釈を固定化する危険を含んでいた。

さらに、この思考スタイルは、批判対象への解釈だけでなく、彼が賛同しようとする人物の解釈すら変えてしまった。心から共感を向ける人物のエピソードを読み解く際、彼の個人史と共振するがゆえに、物語として膨らませられる傾向があったのである。ある教え子が「鶴見さんの発言はだいたい省略と飛躍がありましてね」と留保をつけ、別の教え子が「鶴見先生は、話を非常にふくらませる」と笑いかけたように、鶴見は、高く評価する言葉や行動を過大に捉えてしまい、適切に捉えられないことがあった(木村ほか、2016, 446)。

批判でも賛同でもない事例もある。社会学者の吉見俊哉が、あるとき鶴見に質問を投げかけると、「今までにない答えが聞けるかもしれない」と思わせるフレーズがあった。しかし、すぐに書籍などで「聞き飽き」るほど繰り返されたいつもの身の上話になってしまったという(吉見、2012, 78; 谷川、2016)。この出来事は、エピソードを蓄え、質問にはそれを投げ返すことで答えるという彼の問答スタイルの一面が印象的に表れている。博覧強記に様々なエピソードを引用するというスタイルについて、彼と交友のあった作家の黒川創は解説する。

「キューブをつくるんだ」って言っていたことがありますね。ぎゅっと、キーワードで圧縮して覚えるみたいで、それを解凍して話す(笑)。ポイントがあって、それに絡ませて覚えるんじゃないですか。(鶴見、2017, 101)

自他の個人史の突き合わせとして他者を読もうとするあまり、批判を向ける際の鶴見は、他者の汲みつくせなさを見落とし、「同情」を働かせることにしばしば失敗した。共感的に評価を向ける際には、その個人史を高く見るあまり、誰かの言動を過剰な装飾で物語化した。これは、エピソードの圧縮という方法自体がもたらした歪みだった。

かくして、彼の解釈実践は、解釈理論を裏切るように、人物の言動を類型的に染め上げるきらいがあり、その性向は、結果として鶴見を「ただの人」として読む可能性から遠ざけた(鶴見、2009, 128)。ある人物が、手近に用意できる自己形成のパターンに回収されると、語りのキューブが作られてしまう。卒論題目を通じた師への揶揄が、ほぼ同じ状態で別の箇所に見見できる(鶴見、2010, 26など)ように、キューブは変わらずに展開されるので、そこに埋め込まれた解釈はますます研ぎ澄まされ、画一的なまでに固定化し、改訂から遠ざかる。こうした解釈実践の失敗は、鶴見が理想とした解釈理論が、個人史のエピソードに基づく彼のスタイルと融合することで生じた、避けられない事故のようなものだった。

## 【註】

- (1) 実際の会話には「それを言うなら戦時中、海軍軍属としてインドネシアのジャカルタに送られていたときに、『太平洋上の擬装用植物について』というのがある」との発言もある(鶴見, 2007, 123)。これは鶴見名義の出版物ではない。そうしてまで『アメリカ哲学』を最初の著作と呼ぶ論理を放棄しようしない点に、彼が文章に抱いた幻想が見える。
- (2) 彼は経験と記号の関係から物事を把握するというフームワークを用いることが多い(鶴見, 1992, 鶴見, 1999, 10-6)。
- (3) 貴種や知識人という身分の権力性や、戦争などの他者危害には敏感でありながら、鶴見は、男性性の持つ暴力性には明らかに無自覚だった(彼なりに女性の地位向上にコミットしようとしたとはいえ)。例えば、アメリカから帰国する際、船で長期移動中に同船した女優に抱いていた自身の性的欲望について無頓着に吐露したり、視姦を肯定したり、性的役割分業を自明視したりする発言がそれに当たる(鶴見, 2009, 110; 鶴見, 2015, 63, 130 など)。
- (4) ホワイトヘッドのインガンソル講演に鶴見は聴衆として立ち会っており、その講演の締めくくりに口されたのが、このフレーズだった。
- (5) プラゲマティズムと多元主義についてまとまって論じられている箇所がある(鶴見, 2007, 145-90)。
- (6) 鶴見の老いに関する考えは、『もうろく帖』と呼ばれるノート(編集グループSUREから一部刊行)や、アンソロジー(鶴見編, 1997)に窺える。
- (7) 同情が力説された背景には、極端へ走り、先鋭化していく戦時社会が他者への想像力を著しく欠いたことへの反省があった(鶴見, 1992, 471-2; 谷川, 2019c)。
- (8) 「学びほつき」は、鶴見が留学時代にヘレン・ケラーと交わした会話から受け取った言葉である。
- (9) 教育関係者は、学びほつきや概念くだきに相当することを、多かれ少なかれ意識してきただろう。しかし、先行研究が指摘するように、「イリイチの「ヴァナキユラーな価値」を補助線に引く点で鶴見和子の立論は独創的である(吉見, 2012, 52)。曰く、概念くだきとは、近代化が可能にした「一般概念や理論的達成」をそれぞれの地方での日常生活や概念知との乖離を埋めていく行為であり、「近代国民国家がたどった道すじを反転させ」、「コンテキストを喪失したテキストを、もう一度コンテキストに返して、考えを鍛え直す」実践である。なお、鶴見俊輔はイリイチ来日に言及したことがある(鶴見, 2002, 66-8)。
- (10) 科学的精神という言葉で、フェューイロローティ的な批判や改訂に開かれた「科学者に象徴される徳」を念頭に置いている(cf. 谷川, 2017)。
- (11) この個人性は、自己が究極的には自己自身を離れられないことに根差している(鶴見, 1992, 456)。
- (12) この引用箇所は関川夏央の発言だが、直前で鶴見が述べたことの言い換えであり、鶴見も直後でそれに同意しつつ同じ論点を膨らませているので、より端的な関川の表現を使用した。
- (13) 理解した上で嫌味を言ったのだとも解釈可能である。実際、和子は俊輔にある面で軽蔑されていたことを自覚し

ており、それを晩年に病床で俊輔にぶつけている（鶴見 2009）。

(14) 鶴見は、自分の言動への恥じらいや後悔を持ちながら行動することを重視するあまり、自然に積極的な行動を取ることが出来る人物を反省も銜いもない厚顔無恥として描くことがある（鶴見ほか 2015, 283, 196, 244）。また、行動の「自然さ」をめぐる鶴見の議論については、別稿を参照（谷川, 2019c）。

(15) 自分が受けた母からの抑圧や暴力が姉には向かなかつた理由を、母は不美人で姉は美人だから「妬んでいるみたいでやりづらかったんだ」と邪推し、その解釈を譲ろうとしないシーンがある。インタビュアーが何度か食い下がってはじめて、異なる解釈を示唆するエピソードに言及した（鶴見, 2009, 88-9）。

(16) 物語という認知形態の利点と欠点については、千野 (2017) の説明が簡潔である。

### 参考文献一覧

- 木村聖哉・湯浅進・黒川創『鶴見俊輔さんの仕事①ハンセン病と向きあつて』編集グループ SURE, 2016.
- 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』岩波書店, 1956.
- 小泉英政・川上賢一・黒川創『鶴見俊輔さんの仕事⑤なぜ非暴力不服従に踏みだしたか』編集グループ SURE, 2017.
- 谷川嘉浩「戦後日本における移動と思想の『批判的実践』」：鶴見和子・俊輔・良行の戦後史』『観光学評論』4（一）, pp. 71-3, 2016.
- 谷川嘉浩「ニューイ宗教論における『不安定な覚醒者』」：憂鬱、

科学的方法、レトリック』『人間存在論』vol. 23, pp. 139-50, 2017.

谷川嘉浩「作文はなぜ知的独立性の問題になるのか」：鶴見俊輔生活綴方、想像力』『人間・環境学』vol. 27, pp. 89-99, 2018.

谷川嘉浩「幻視する梅原猛、会話する鶴見俊輔」：孤独、共同体、辺境』『ユリイカ 絵特集』梅原猛』4月臨時増刊号, pp. 242-56, 2019a.

Tanigawa, Y., "Shunsuke Tsurumi and John Dewey on Habits and Imagination: Bridging the Pragmatist Ethics between Japan and America," *Annals of the University of Bucharest, Philosophy Series*, 67 (2), pp. 21-38, 2019b.

谷川嘉浩「倫理としての『不自然な自然さ』」：鶴見俊輔のプラグマティズムと社会運動をつなぐ』『フィルカル』4（2）, pp. 248-300, 2019c.

谷川嘉浩「無数の理想を収集する鶴見俊輔」：他愛ない夢、想像的変身、感性的横ずれ』『フィルカル』4（6）, pp. 228-58, 2019d.

千野帽子「人はなぜ物語を求めるのか」筑摩書房, 2017.

鶴見和子『社会変動と個人』：鶴見和子曼荼羅 III』藤原書店, 1998.

鶴見俊輔『鶴見俊輔集 3』：記号論集』筑摩書房, 1992.

鶴見俊輔編『老いの生き方』筑摩書房, 1997.

鶴見俊輔・西成彦・神沢利子「神話とのつながり」熊本子ども本の研究会, 1997.

鶴見俊輔『限界芸術論』筑摩書房, 1999.

鶴見俊輔『大人になるってなに。』晶文社, 2002.

鶴見俊輔『たまたま、この世界に生まれて』：半世紀後のアメリカ

カ哲学講義』編集グループ SURE, 2007.

鶴見俊輔 『アメリカ哲学』こゝろし書房, 2008a.

鶴見俊輔 『期待と回想…語り下ろし伝』朝日新聞出版, 2008b.

鶴見俊輔 『不逞老人』河出書房新社, 2009.

鶴見俊輔 『かくれ佛教』ダイヤモンド社, 2010.

鶴見俊輔・関川夏央 『日本人は何を捨ててきたのか』筑摩書房, 2015.

鶴見俊輔・網野善彦 『歴史の話…日本史を問い直す』朝日新聞出版, 2018.

吉見俊哉 『アメリカの越え方…和子・俊輔・良行の抵抗と越境』弘文堂, 2012.